

授業科目	構音障害 I (臨床の基礎)				
担当者	松本 治雄				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

話しことばの3要素である「構音」「音声」「パタン」のうち、コミュニケーション効率からみて最も中核をなすのは構音である。言語聴覚士の仕事の大半は構音指導であると言える。講義は言語聴覚士が構音指導上基本として身につけるべき内容を演習的に修得することを目指している。

■ 到達目標

- ① コミュニケーション行動における話しことばの役割を知る。
- ② 構音の概念を理解し、正常構音の産生の機序を知る。
- ③ 構音障害の概念を理解し、障害像を知る。
- ④ 構音障害の種類について理解し、その検査、分析に基づく治療方法を知る

■ 授業計画

- 第1回 障害児音声の聴き取りとコミュニケーションの関わる要因について
- 第2回 発声発語器官の構音産生に関わる機序について
- 第3回 日本語音声の成り立ち 母音①
- 第4回 日本語音声の成り立ち 母音②
- 第5回 日本語音声の成り立ち 子音①
- 第6回 日本語音声の成り立ち 子音②
- 第7回 言語障害に関わる要因①
- 第8回 言語障害に関わる要因②
- 第9回 構音指導の検査と評価①
- 第10回 構音指導の検査と評価②
- 第11回 構音指導の方法①
- 第12回 構音指導の方法②
- 第13回 事例による演習①
- 第14回 事例による演習②
- 第15回 事例による演習③ と まとめ

■ 評価方法

筆記試験 (90%) とレポート (10%) を加味する。

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

- ① 日本語音声のすべての構音操作の理解と自身で構音を完璧に仕分ける。
また、言語聴覚士として構音操作を指導していくためには、複雑な構音操作を患者の年齢や理解度に合わせてステップ化して、訓練目標を理解させ、最終的には完璧に構音操作ができるよう、その修得過程を工夫する事が必要である。
- ② 発音記号の熟達 (様々な音声を適確に聴取し、同時に記述できるよう無意識的に操作できる身体動作として身につける)
- ③ 原則、毎回小テストを実施していくので、自己の熟達度を測り100%を達成する。

■ 教科書

書名：改訂 機能性構音障害
著者名：本間慎司編著
出版社：建帛社

■ 参考図書

書名：構音障害の臨床 改訂第2版
著者名：阿部雅子
出版社：金原出版

書名：音声表記・音素表記 記号の使い方ハンドブック
著者名：今井亜子
出版社：協同医書出版社

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業は単なる講義としてではなく、演習か実習として、能動的に受講する内容となる。自転車や自動車の運転のように、最初はもたついていても、しっかり心身が操作を身につけてしまえば、自然と様々な状態に対応できるようになる。このような言語聴覚士として成長することを目指して欲しい。